

住居廃絶過程と注口土器

阿部友寿

1. 分析対象について

関東地方南部には、後期初頭から中葉の住居跡床面付近にて出土する注口土器がある。ここでは、とくに完形もしくは完形に近い略完形の状態で出土する注口土器に注目し、この事象にかかわる関係性を抽出したい。

最近、筆者は、神奈川県秦野市稻荷木遺跡の発掘調査にかかわる機会をえた。発見された縄文時代中後期集落の発掘調査に携わることでさまざまな課題が浮かびあがった。そのひとつが、後期前葉の住居跡で略完形の注口土器が床面直上付近から出土する事例である。当遺跡では、

堀之内2式～加曾利B1式期の住居跡（12区J3号住居跡、17区J6号・J7号住居跡など）から出土する略完形の注口土器が目立つ。なかでも17区J7号住居跡では、注口土器が環礫方形配石遺構の直上から出土している（写真1、阿部2023）。今後、報告をまとめるための基礎データとしてこれを集成し、住居床面付近での略完形注口土器の出土が放置によるものとして住居廃絶過程のなかに位置づけたい。くわえて、その行為の意味について住居形態や集落構造から関係性を抽出しておきたい。

すでに須原 拓氏や中村耕作氏によってこれらの集成や考察がなされている（須原2003、中村2013）。これに追加資料をくわえて第1表に類例を掲げた。注目すべき点として、分布の中心が甲信地域から関東地方西部にあり関東地方東部では極端にその数が減ること、それが堀之内2式を中心とした堀之内式期から加曾利B1式期にかけてみられること、注口土器が床面付近から出土する住居跡が数十軒に1軒ほどの割合であることなどがあげられる。一方、加曾利B2式以降では、住居跡覆土上層から出土する例が多く、床面付近から出土する例は希である。

須原氏は、後期前葉を中心に住居跡の床面付近から注口土器が略完形の状態で出土する事象の系譜について、焼失家屋との関連や奥壁際の出土例が多いことから中期の廃絶儀礼に求めた（須原前掲）。一方、中村氏は、略完形の注口土器が墓坑と同じように住居跡から出土することを重視する（中村前掲）。住居床面出土例と副葬例の共通性から、儀礼の場に埋納・供献する注口土器について副葬と床面供献という2つの儀礼行為で一致したあり方をしているとした（中村前掲、221頁）。

これらをふまえて本稿では、注口土器の放置を住居廃絶過程のなかに位置づけ、その行為の意味を集落における墓域との関係性から考えてみたい。

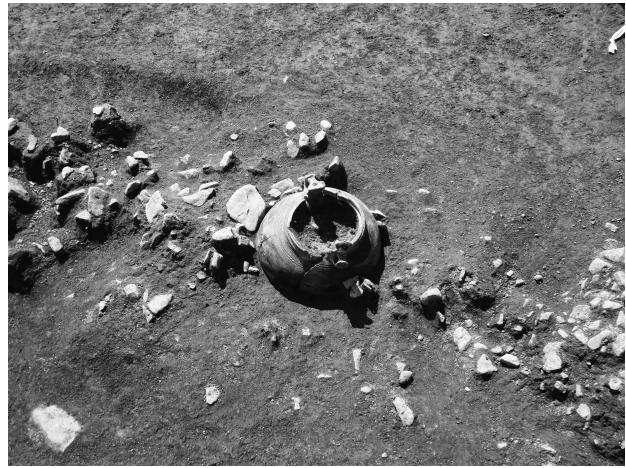


写真1 稲荷木遺跡17区J7号住居跡注口土器出土状況
(阿部2023より)

2. 住居廃絶後における注口土器の放置

注口土器放置は、住居廃絶後のどの段階に位置づけることができるのであろうか。そこで本稿は、とくに注口土器の出土位置に注目する。注口土器がほぼ床面直上から出土する例にくわえ、住居内焼土や環礫方形配石遺構といった廃絶後の改変や住居内施設との前後関係をうかがわせる事例を用いる。

住居廃絶にかかわる注口土器の出土状況として以下の三つの視点をあげる。（1）周礫や環礫方形配石遺構との上下関係、（2）住居内焼土や炭化物との共伴、（3）注口土器の被熱痕・二次焼成痕である。

（1）周礫や環礫方形配石遺構との上下関係を示すものとして、さきの稻荷木遺跡17区J7号住居跡に類する状況が荒砥二之堰第34号住居跡出土例、横壁中村19区21号住居跡出土例、沼目・坂戸第II地点3号住居址出土例にみられる。いずれも注口土器が周礫や環礫方形配石遺構と同レベルもしくはこれらの直上から出土する。これにくわえて池之元第1号住居址出土例では、注口土器が壁際の床面に掘られた溝から出土している。この溝が周礫や環礫方形配石遺構にともなうとするなら、これも上記例に含められよう。

（2）略完形の注口土器が住居内の覆土下層もしくは床面に分布する焼土や炭化物と共に伴する例には次のものがある。宮内井戸作II地区59号住居跡出土例では焼土層中もしくは焼土層下、赤山陣屋跡5号住居址では焼土層中、多摩ニュータウンNo.245の45号住居跡では焼土・炭化物ブロック直下、多摩ニュータウンNo.194の1号住居跡では床面焼土・炭化物の上面、なすな原No.1地区121号住居址では焼土中、称名寺貝塚D地点J5号住居址では床面焼土上面、下北原第3次J11号敷石住居址では焼土上面、原・郷原2号住居跡では焼土中からそれぞれ出土する。覆土下層もしくは床面直上の焼土・炭化物層中もしくは層下が主体を占める。これらの焼土や炭化物は、住居への火入れもしくは焼土の投棄によるものとされる。その一方で、焼土上面から出土する多摩ニュータウンNo.194の1号住居跡例や称名寺貝塚J5号住居跡例などは床面そのものが焼土化している。これらの焼土、炭化物形成要因については後述しよう。

（3）注口土器自体に被熱痕や二次焼成痕が確認できたものとして、五反目4号住居跡出土例、上小笠原第5号住居跡出土例、深沢SB02出土例、多摩ニュータウンNo.245の9号住居跡出土例、華藏台48号住居跡出土例がある。五反目4号住居跡出土例以外はいずれも焼失住居であることから、放置後の火入れや焼失による二次焼成が想定される。しかし、被熱痕の程度に差がある。注口土器の一部に二次焼成や被熱痕がある一方で、焼土層中もしくは直下から出土したにもかかわらず、被熱痕がないものもある。これは、出土状況から注口土器が火入れの際に埋まりかけていた可能性がある。この場合、放置から火入れまでのあいだに若干の時間的経過が想定される。

これら（1）～（3）はいずれも住居廃絶後とそのちの火入れなどによる住居改変以前に床上に注口土器が置かれたことを示している。上記にくわえて、社口第3次19号住居跡例でも大型礫直下の床面直上で注口土器が発見されている。大型礫は住居廃絶後の改変によるものであり、それ以前に注口土器が放置されたことになる。これも改変前に注口土器が置かれた例に該当しよう。

住居廃絶後の行為のなかで注意しなければならないのが上記（2）の焼土や炭化物の形成要因である。想定されるものとして火入れと焼土・炭化物の投棄があげられるが、上記の例でその形成要因を特定することは難しい。ただし、床面だけが被熱する例は、床面形成時もしくは住居使用時の床面被熱と考えられる。多摩ニュータウンNo.194の1号住居跡や称名寺貝塚J5号住居址は、床面の上面が焼けているにもかかわらずその上に焼土や炭化物の堆積がない。また、敷石住居跡である深沢SB02では、敷石下の掘り方上面に焼土が形成され、敷石以前の被熱とされる。これを除くと形成要因の特定は難しく、とくに焼土や炭化材の片付

けを考慮するならますます火入れと投棄の区別も曖昧になる。ひとまずここでは、上記の状況を加味して、火入れと焼土投棄のいずれも住居廃絶後の改変行為としてとらえておきたい。

注口土器の放置を住居廃絶過程のなかに位置づけてみよう。まず、(1) と (2) から、注口土器は、住居廃絶直後から火入れなどの住居改変前までに意図的に放置されたのだろう。これは、(3) で観察される注口土器の二次焼成痕が火入れ時に生じたとすることとも矛盾しない。称名寺貝塚 D 地点 J5 号住居址出土例のように、焼土化した床面上に位置し、赤山陣屋 5 号住居址例のように焼土分布範囲と同じもしくは直下にあることとも合致する。いずれも想定される注口土器放置過程に整合している。

以上から、住居廃絶直後に注口土器が放置され、そのうちに焼土や炭化物などを堆積する改変がなされたと考えられる。注口土器放置は、(1) ~ (3) の状況から住居廃絶直後から火入れなどの廃絶住居改変前の短い時間幅のなかで意図的におこなわれた。この場合、注口土器の放置は供献や埋置といった意味が適する。しかも被熱に強弱があることから注口土器の放置から火入れなどの住居改変には若干の時間幅が予想される。つまり、住居廃絶直後に注口土器が供献され、やや時間をおいて火入れなどの住居改変がなされたとの想定が妥当であろう。

3. 床に残された注口土器の関係性

一方で、注口土器を供献する意味について、これをとりまく関係性からみておきたい。住居床面付近に略完形の注口土器を置いた背後には何らかの意図があったはずである。しかも供献行為は、住居廃絶直後から住居を改変する前の比較的短い時間のなかでおこなわれた。それまで利用していた場を手放すことに対するなんらかの行為と考えたくなる。

第1表に示したように、このような事象が看取できる地域は、関東地方西部から甲信地域が中心で、関東地方東部で極端に少ない。中心となる西部地域での住居形態に関する特徴的な事象として、柄鏡形敷石住居、環礫方形配石遺構、焼失住居があり、分布のうすい東部を中心に大形住居が存在する。住居形態との相関からみた場合、床面出土注口土器が分布する地域は、西部の山地周辺にある敷石住居や環礫方形配石遺構の分布域より広く、東京湾西岸や奥東京湾地域において柄鏡形住居や焼失住居と分布域が重なる。その一方で、関東地方東部（東京湾東岸）における大形住居分布域は、床面出土の注口土器分布域と排他的なあり方を示す。

住居型式について菅谷通保氏は、東京湾東岸地域の加曽利 B1 式期に祇園原 1 式（円形基調で主柱穴をもつ）の住居型式を設定する（菅谷1995）。東京湾西岸地域（相模野地域や武藏野台地）における堀之内式～加曽利 B1 式期の住居形態が、猿田式（柄鏡形）から港北 1 式への変遷をたどり、奥東京湾地域である大宮台地では一段階遅れた変遷をたどるという。これに対し東京湾東岸の北総地域は後期前葉の猿田式のち加曽利 B1 式期に祇園原 1 式や大形住居が分布するというのだ。

焼失住居との関連は、住居床面から出土する注口土器の先行研究をおこなった須原 拓氏も注目している（須原前掲）。焼失家屋の定義に若干の問題を含みつつ、炭化物や焼土を堆積する住居からの出土例が多いことから、住居廃絶時の火入れ行為に関連した遺物とされた（須原前掲36頁）。さきに示したように、二次焼成痕をもつものや焼土まみれで出土するものなど確かに焼土と直接的関連をもつ事例は多い。

東京湾東西地域における中期末葉から晩期の住居形態の差について述べた川島裕毅氏は、焼土の廃棄や火入れが、すでに堀之内式期に東京湾西岸地域や奥東京湾地域まで広がっていたのに対し、東京湾東岸地域では、加曽利 B 式以降に住居の大型化とともに導入されるようになったとする（川島2011、116頁、川島2012、

95頁)。

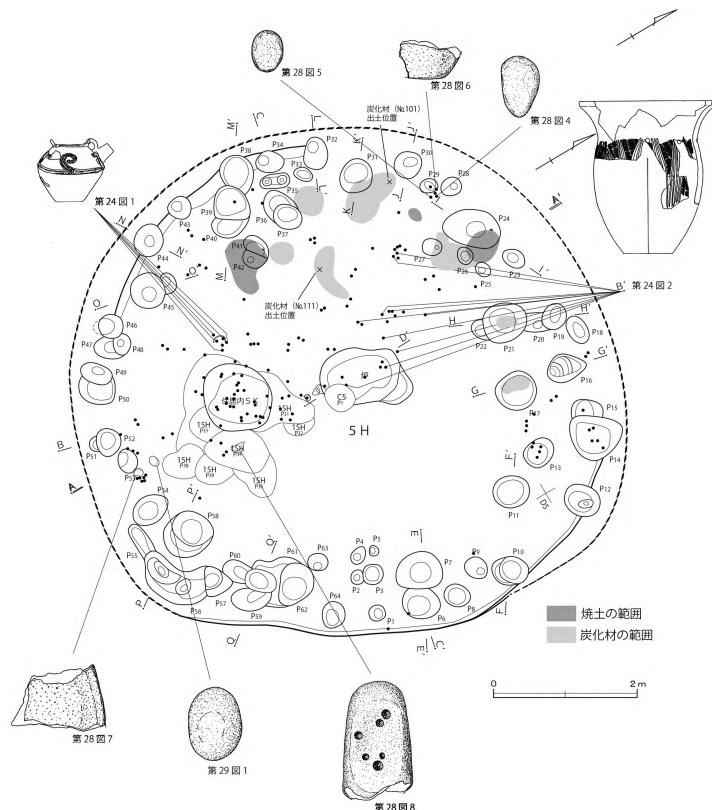
集落を構成する住居と墓域との関係性でみると、この時期（堀之内式～加曾利B1式期）は、特定の住居に近接して墓域をもつことが特徴であった（石井1994）。東京湾西岸から奥東京湾にかけての大宮台地以西では、特定住居跡前面といった相対する位置に墓域を構築するのに対し、旧利根川を境に東京湾東岸では必

第1表 住居床面出土注口土器

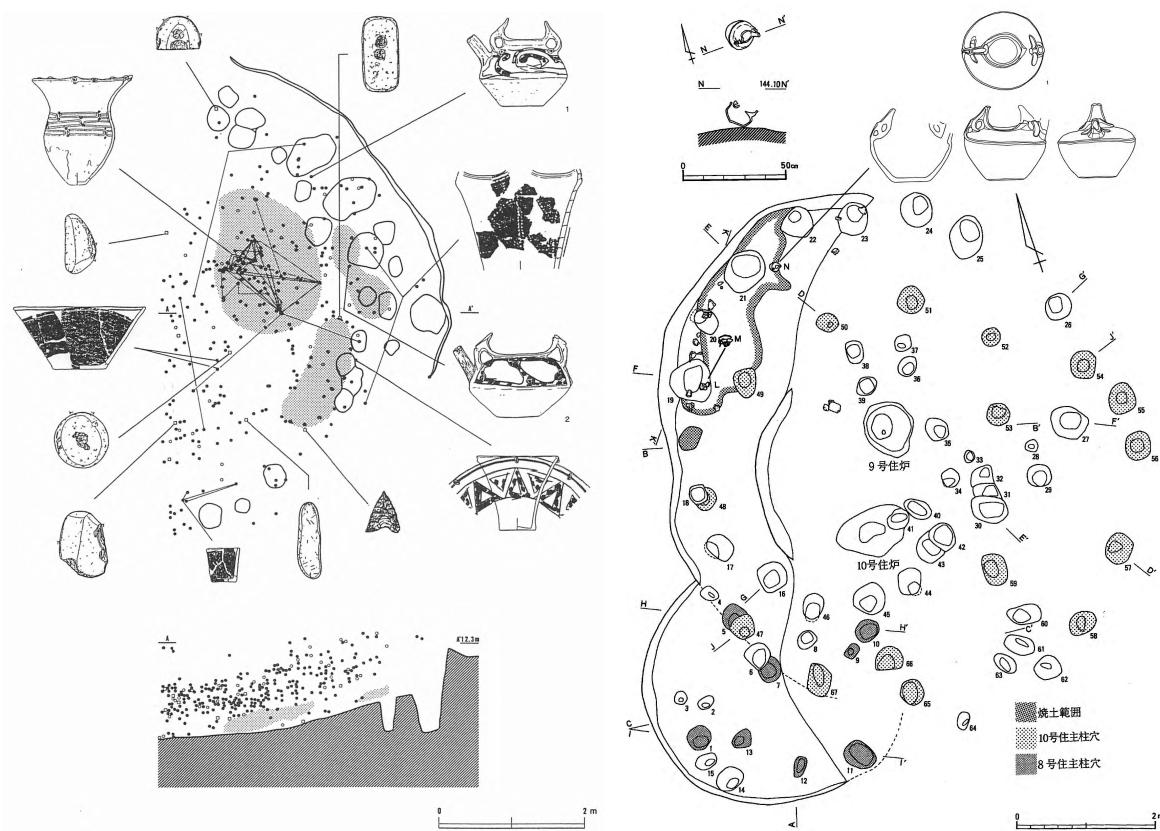
遺跡名	遺構名（挿図No.）	出土位置・出土状況	時期	備考（共伴遺物・焼失など）	文献
千葉県					
市川・株木B第2地点	5号住居跡	中央・炉付近（図版9-1）	堀之内1	底部欠	花輪ほか1983
佐倉・五反目	4号住居跡	住居中央や北側、二次焼成（23-2）	堀之内1	口縁・注口・胴下半欠	宮ほか1991
佐倉・宮内井戸作	II地区59号住居跡	壁際（28-23・122-25）、焼土中下	加曾利B1	ミニチュア土器（121-24）注口（122-25）内？、小形深鉢・軽石製品、大形住居廃絶後焼土投棄	小倉ほか2009
市原・能満上小貝塚	22号住居跡	壁柱穴内（93-32）	安行1	注口完形	忍澤1995
君津・寺ノ代遺跡	035（竪穴住居）	北壁付近（32-5）	堀之内1	注口欠	小林ほか2001
栃木県					
宇都宮・御城田	SI70	炉と奥壁の間（170-2）	堀之内1		塚本ほか1986
下野・横倉	SI76	奥壁寄り（21-4）	堀之内2	玉・大形深鉢底部（逆位）共伴	齋藤ほか2016
群馬県					
前橋・荒砥二之堰	第34号住居跡	奥壁・周礫上面（121-2）	堀之内1	焼失住居	石坂ほか1985
太田・矢太神沼	1号住居跡	南東柱穴付近（755-7）	堀之内1	石劍・石棒・鉢・蓋付小型壺形土器、焼失住居	中里ほか1988
長野原・懈II	1号住居跡	北壁付近	堀之内1		金井ほか1990
長野原・横壁中村	19区21号住居跡	壁際・周礫内（21-15）	称名寺2～堀之内1古		石田ほか2009
長野原・横壁中村	19区24号住居跡	壁際・柱穴内（柱9）（29-3）	称名寺2終末		石田ほか2009
長野原・石川原（3）	75号竪穴建物	平面位置不明（76-4）	称名寺2終末		鈴木ほか2021
長野原・石川原（3）	96号竪穴建物	中央（注口付楕形土器・98-3）	堀之内1古		鈴木ほか2021
長野原・石川原（3）	106号竪穴建物	周堤内（123-41）	堀之内2	注口部をふさぎ再利用	鈴木ほか2021
甘楽・白倉下原	A区96号住居跡	南壁近く（22-3）	堀之内2	口縁・注口欠	木村1994
渋川・三原田	3-29号住居跡	炉付近	堀之内2		赤山ほか1980
渋川・前中後	II区J-1号住居跡	入口列石付近（45-1）	堀之内2	注口欠	長谷川ほか2010
埼玉県					
白岡・上小笠原（第1-2-3地点）	第5号住居跡（1）	中央・二次焼成（24-1、器面剥離）	堀之内1	焼失住居、大形住居	杉山ほか2013
鴻巣・中三谷	第15号住居跡	柱穴（P6）内・小形注口（82）	堀之内2	注口大破片	細田ほか1989
さいたま・大木戸（II）	第3号住居跡	中央・北東壁寄り（46-103）	堀之内2	注口2（103口縁～底部、102体部大破片）	新屋ほか2013
さいたま・大木戸（II）	第9号住居跡	中央・北東寄り（84-9）	加曾利B1	注口3（9口縁～底部、8・10大破片）	新屋ほか2013
さいたま・大木戸（II）	第15号住居跡	南東壁際（128-11）、床上20cm（11のみ床付近）	加曾利B2	注口7（11～17）、11体部下半欠、12～17大破片～破片	新屋ほか2013
さいたま・西大宮バイパスNo.6	第3号住居跡	壁際・P18右（50-1）	堀之内2式新	垂飾、焼失住居	山形ほか1995
さいたま・御藏山中	J14号住居跡	壁際・P16・19間（59-7）	堀之内2	把手欠	山形ほか1989
さいたま・神明	第2号住居跡	中央やや南東寄り（17-1）	堀之内2	把手欠	細田ほか1987
さいたま・馬場小室山第32次	第5号住居跡	位置不明・覆土下層（D層）（125-14）	安行3a	注口部および一部欠損（3／5残存）	柳田ほか2015
川口・赤山陣屋跡	4号住居跡	壁際・北東壁付近（19-4）	堀之内1	大形住居、深鉢・浅鉢・ミニチュア土器、焼土投棄・焼土層遺物なし	金箱1987・1989
川口・赤山陣屋跡	5号住居跡（2）	壁際・北西壁近く・焼土層に混入（27-1・2）	堀之内1	注口2・深鉢・浅鉢・ミニチュア土器、焼土投棄・焼土層に遺物（注口）混入	金箱1987・1989
東京都					
北区・西ヶ原貝塚（II）	SI03号住居跡	中央・炉付近（53-59）	堀之内1	貝層	中島ほか1994
北区・西ヶ原貝塚	21号住居跡	平面位置不明（192-1・2）	堀之内2	注口2	西澤・栗城2011
八王子・深沢	SB02	壁際・張出基部付近、二次焼成（12-3）	堀之内1	注口部欠、焼失住居・掘り方被熱	佐藤ほか1981
町田・多摩ニュータウンNo.245	9号住居跡（3）	奥壁・北西壁、柱穴付近・二次焼成（25-1）	堀之内1	深鉢、焼失住居	山本ほか1998
町田・多摩ニュータウンNo.245	45号住居跡（4）	奥壁・北壁近く・P17上（205-1）、焼土・炭化物ブロック直下	堀之内1		山本ほか1998
町田・多摩ニュータウンNo.245	52号住居跡	壁際・北壁近く（235-30～34）	堀之内2	石棒・石製品・深鉢、焼失住居・注口底部に注口部のせる。	山本ほか1998
町田・多摩ニュータウンNo.194	1号住居跡	奥壁・南壁近く・床面炭化物・焼土上面（41-1）	堀之内2	注口2（41-1・39-4）	館野ほか1996
町田・なすな原No.1地区	102号住居跡	北東壁・P38付近（118-1～3）	堀之内2	ヒスイ製垂飾・注口土器3点、炉址付近に焼土	成田ほか1984
町田・なすな原No.1地区	108号住居跡	位置不明（128-2・3）	堀之内2	注口口縁・注口部欠損2、焼失住居	成田ほか1984

住居廃絶過程と注口土器

遺跡名	遺構名（挿図 No.）	出土位置・出土状況	時期	備考（共伴遺物・焼失など）	文献
町田・なすな原 No.1地区	121号住居址	南壁・P90付近、焼土中（163-1）	堀之内2	注口大破片（163-2～4）、石製垂飾、焼失家屋？	成田ほか1984
町田・なすな原 No.1地区	127号住居址	東壁付近（177-1）	堀之内1	深鉢・鉢・小型壺、焼失住居？	成田ほか1984
町田・なすな原 No.1地区	149号住居址	壁際（220-2）	堀之内2新	小形深鉢	成田ほか1984
町田・なすな原 No.1地区	158・159号住居址	東北隅・床面上層（139-5）	大洞BC	注口口縁・注口部欠	成田ほか1984
町田・なすな原 No.2地区	113号住居跡	奥壁・柱穴（P78）付近（243-7）	堀之内2	タール状の種子（エゴマ？）	成田ほか1996
町田・向	2号住居跡	北西壁付近（142-28）	加曾利B1		横尾ほか1991
町田・東雲寺上	2号住居跡	奥壁と炉の間（17-40）	堀之内1	注口1/2欠損	後藤ほか2010
町田・野津田上の原	J11号住居址	平面位置不明（31-2）	堀之内2	注口把手欠	金子ほか1997
神奈川県					
横浜都築・原出口	6号住居址	奥壁・西壁近く（152-1）	堀之内2		石井1995
横浜都築・原出口	11号住居址	奥壁・北東壁近く（161-1）	堀之内2		石井1995
横浜都築・原出口	12号住居址	奥壁・柱穴10付近（164-1）	堀之内2	焼失住居	石井1995
横浜都築・原出口	14号住居址	奥壁・北東壁近く（176-1）	堀之内2	深鉢	石井1995
横浜都築・原出口	20号住居址	壁際・北東壁近く（194-5）	堀之内2	深鉢4点・土偶、焼失住居	石井1995
横浜都築・原出口	21号住居址	奥壁・北壁近く、土器片上に注口土器（200-71）	堀之内2	深鉢	石井1995
横浜都築・小丸	20号住居址	炉と奥壁の間（67-1）	堀之内2	注口1/3残	石井1999
横浜都築・小丸	22号住居址	中央・炉左（73-2）	堀之内2新	注口大破片、浅鉢、焼失住居	石井1999
横浜都築・小丸	36号住居址	住居中央炉付近、床面若干浮く（96-1）	加曾利B1古	注口大破片	石井1999
横浜都築・華藏台	43a・b号住居址	壁際（P77、78、173付近）（198-2）	堀之内2式新	深鉢	石井2008
横浜都築・華藏台	48号住居址（5）	壁際・二次焼成（214-3）	堀之内2	焼失住居	石井2008
横浜金沢・ 称名寺貝塚D地点	J5号住居址（6）	中央？・床面焼土上面（19-1）	加曾利B1		降矢ほか2019
藤沢・西富貝塚第1次	第1号址	壁際（16-2）	加曾利B1新	焼失住居	寺田ほか1964
伊勢原・東大竹・下谷戸 (八幡台)	4号住居址	中央・炉東脇（14-8）	加曾利B1古		坪田ほか2008
伊勢原・ 沼名・坂戸第II地点	3号住居址（7）	中央（15-3）と壁際（15-4）・環礫 方形配石同レベル	加曾利B1	注口2（15-3・4）・深鉢（15-1）	戸田ほか1999
伊勢原・下北原第3次	J11号敷石住居址	炉と西壁の間・焼土上層（120-5）	加曾利B1	焼失住居（焼土・炭化物）	小森ほか2014
山梨県					
富士吉田・池之元	第1号住居址（8）	奥壁・有段北西部溝（16-99-17- 101-18-102）	堀之内2	注口3、焼失住居	阿部ほか1997
上野原・原・郷原	2号住居址（9）	中央・焼土中（18-1）	堀之内2	焼失住居	小西2000
山梨・中久堰	1号竪穴	奥壁（7-12）	堀之内2	注口3（ほぼ完形-12、大破片 -10・11）	櫛原2008
北杜・社口第3次	19号住居跡（10）	奥壁・礫直下床直上（113-9）	堀之内2		櫛原ほか1997
笛吹・上ノ原	C-75号住居跡	奥壁・床直（318-6）	堀之内2新		櫛原ほか1999
北杜・姥神	7号住居跡	平面位置不明（19-4）	堀之内2	注口部欠	櫛原1987
北杜・姥神	10号住居跡	平面位置不明（30-23・24）	加曾利B1	注口2・注口部欠1	櫛原1987
都留・中谷	15号住居跡	平面位置不明（56-66）	堀之内1		長沢ほか1996
長野県					
佐久穂・宮の本	敷石住居址	平面位置不明（22-1・5）	堀之内2	ほぼ完形（-1）・大破片（-5）	林1979
岡谷・梨久保	40号住居址	奥壁（151-146）	堀之内2		会田ほか1986
岡谷・花上寺	53号住居址	平面位置不明（104-169）	堀之内2	大破片	高林ほか1996
塩尻・御堂垣外	3号住居址	中央（8-15）	堀之内2		市沢ほか1988
松本・林山腰	4号住居址	中央（26-86）	堀之内2		竹林ほか1988
小諸・石神	J40号住居跡	平面位置不明（166-5）	堀之内2	注口底部欠	花岡ほか1994
茅野・中ヶ原	54号住居跡	中央？（113頁）	堀之内2	小形土器共伴、焼失住居？	小池・山崎1993
長野・村東山手	SB08	中央（16-21）	堀之内2	注口3（ほぼ完形1（-21）、大破片 2（-20・22））	鶴田1999
長野・村東山手	SB13	壁際と中央の間（34-49～51）	堀之内2	注口3（埋設1（-49）、ほぼ完形1 （-51）、大破片（-50））	鶴田1999
岐阜県					
高山・垣内	34号住居址	平面位置不明（240）	堀之内2	双口土器（241-2）	石原ほか1991
高山・垣内	61号住居址	平面位置不明（257）	加曾利B1式	大破片	石原ほか1991



1. 白岡・上小笠原第5号住居跡 (杉山ほか2013より作成)

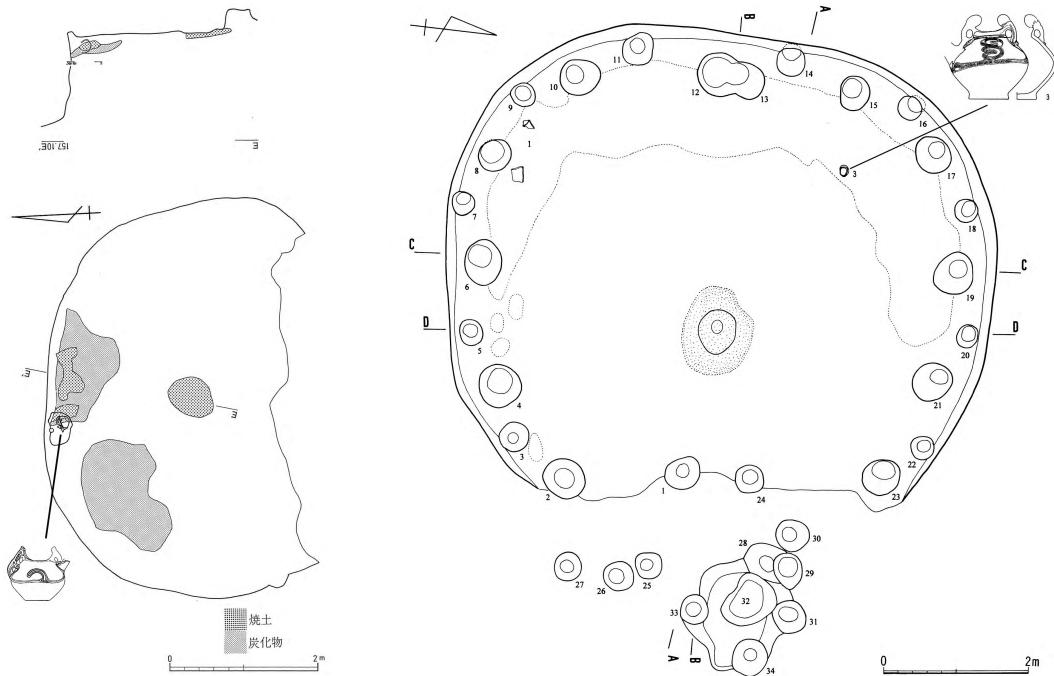


2. 川口・赤山陣屋跡第5号住居跡 (金箱1988より)

3. 町田・多摩ニュータウンNo.245-9号住居跡 (山本ほか1998より)

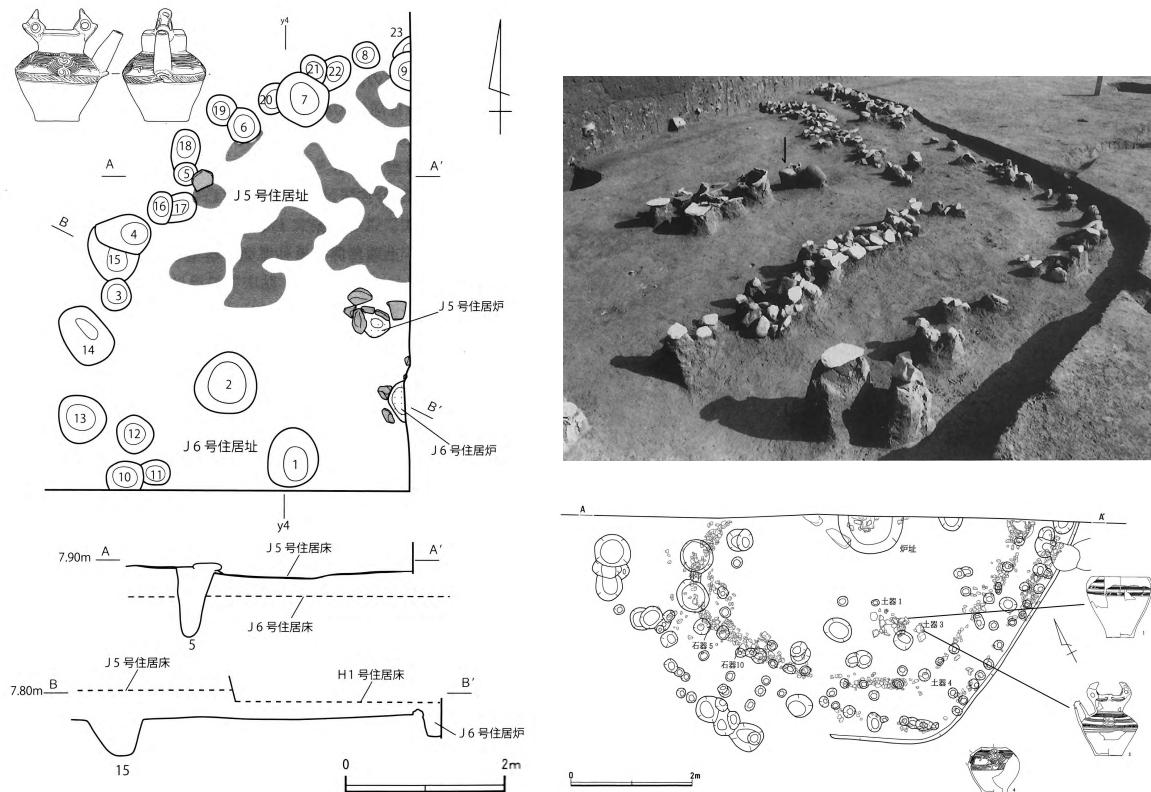
第1図 注口土器出土例 (1)

住居廃絶過程と注口土器



4. 町田・多摩ニュータウン No. 245-45号住居跡（山本ほか1998より）

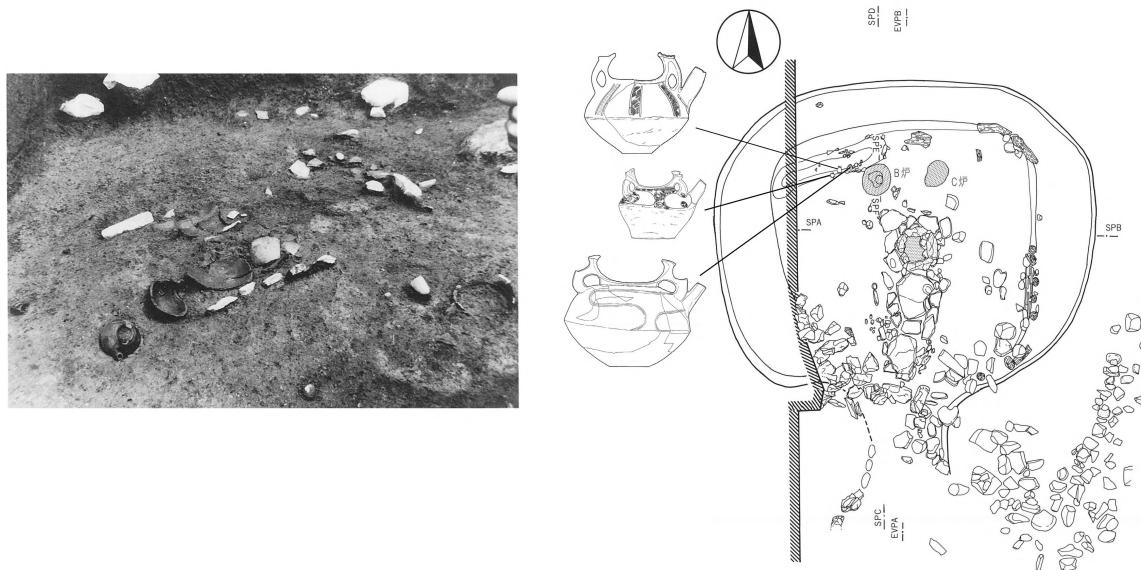
5. 横浜都筑・華藏台48号住居址（石井2008より）



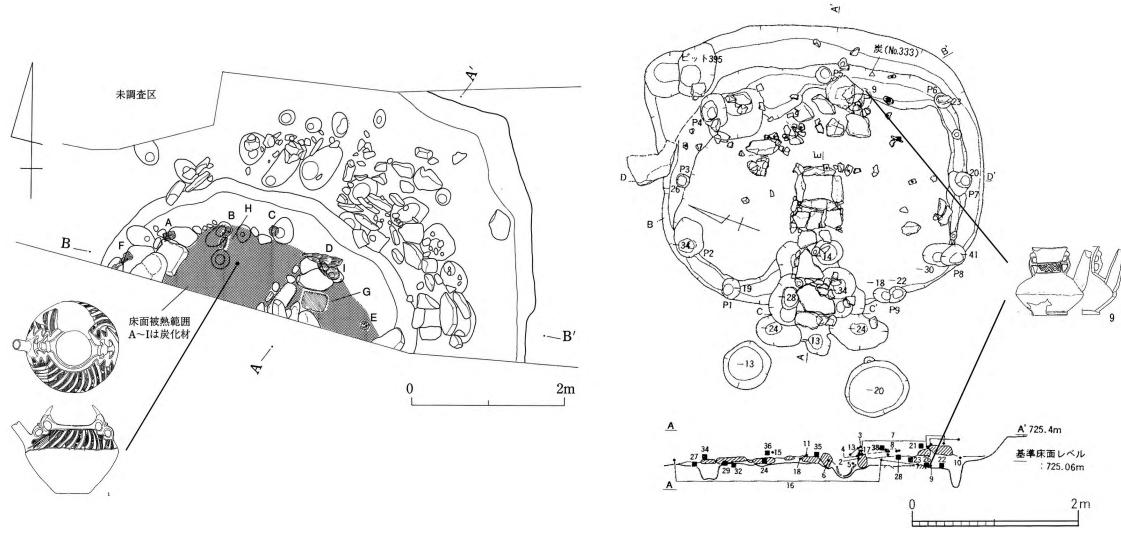
6. 横浜金沢・称名寺貝塚D J 5号住居址（降矢ほか2019より）

7. 伊勢原・沼目坂戸II 3号住居址（戸田ほか1999より）

第2図 注口土器出土例（2）



8. 富士吉田・池之元第1号住居址（阿部ほか1997）



9. 上野原・原・郷原2号住居址（小西2000より）

10. 北杜・社口3次19号住居跡（櫛原ほか1997より）

第3図 注口土器出土例（3）

ずしも前面に限らない（阿部2016）。住居と墓が対向する地域と注口土器を両者に供献、副葬する地域が重なることも、それらの行為の意味を考えるうえで重要であろう。

一方で中村耕作氏が指摘するように副葬品との相関がある（中村2013）。注口土器もこの時期（堀之内式～加曾利B1式期）の副葬品として用いられる一方で、住居床面上に略完形で出土する。くわえて、その分布域は、副葬品と同じく、関東地方西部から甲信地域を中心とする（中村2013、221頁）。

住居への埋葬を思わせる例もある。たとえば、横倉遺跡住居跡SI76では、床面直上にて略完形の注口土器が発見された。報告において、SI76の住居跡内から床面直上の注口土器とともに近接する床面上から玉や逆位の深鉢底部が出土（「深鉢逆位設置+注口土器・玉の出土」）したとされ、このことから埋葬に関連した行為があったという（齋藤ほか2016、426頁）。同様に、西大宮バイパスNo.6遺跡でも注口土器が出土した第3号住居跡のP4付近から垂飾が出土し、なすな原No.1地区102号住居址（ヒスイ製垂飾）、121号住居跡（垂飾）でも玉類との共伴が確認できる。廃屋への埋葬の有無は不明だが、葬送に類する行為があったのだろう。

まとめると以下の点が指摘できる。1. 住居への注口土器供獻は住居廃絶直後から廃絶住居の改変前におこなわれた。2. 住居内床面付近に供獻された注口土器に地域的偏在が認められ、これに關係する住居形態として柄鏡形敷石住居や環礫方形配石遺構にくわえ焼失家屋との関連がより強く、大形住居とは排他的である。3. その意味として、注口土器の供獻は、墓域と特定住居との近接や対向性といった集落形態とも相關し、住居廃絶と葬送との同義性をうかがわせる。さらにそれは、「住居廃絶—供獻—改変」と「死者の発生—副葬—埋葬」といった住居廃絶と葬送のそれぞれの過程に呼応し、各段階は儀礼過程（分離—過渡—統合）に通底するものであったろう（ファン・ヘネップ2012）。廃絶直後の供獻に対し火入れなどの改変までに若干の時間幅をもつことも、それが期間の経過とともに変化する過渡期に相当することを物語っている。

小論の執筆にあたり、小澤政彦氏（公益財団法人千葉県教育振興財団）には資料や情報収集について多大なご協力をいただいた。末筆ながらご教示とご厚意に感謝を申し上げる。

【引用・参考文献】

阿部友寿2016「関東南部における住居と墓の関係（2）」『神奈川考古』第52号、37-66頁

阿部友寿2023「稻荷木遺跡第2次調査」『考古学財団30年史』公益財団法人かながわ考古学財団設立30周年記念誌、44-51頁

アルノルト・ファン・ヘネップ（綾部恒雄・綾部裕子訳）2012『通過儀礼』岩波文庫

石井 寛1994「縄文後期集落の構成に関する一試論—関東地方西部域を中心に—」『縄文時代』第5号、77-110頁

川島裕毅2011「縄文時代中期末～晩期の住居形態にみる南関東の東西差—神奈川と千葉の事例を中心に—」『印旛郡市文化財センター研究紀要』8、103-135頁

川島裕毅2012「武藏地域と下総地域における柄鏡形住居の受容比較」『印旛郡市文化財センター研究紀要』9、87-106頁

菅谷通保1995「堅穴住居から見た縄文時代後・晩期一房総半島北部（北総地域）を中心とした変化について—」『帝京大学山梨文化財研究報告』第6集、97-142頁

須原 拓 2003「住居跡内出土の注口土器—出土状態からみた注口土器の機能・用途について—」『史叢』第68号、21-44頁

中村耕作2013「補論 住居床面出土の注口土器にみるカテゴリ認識の共通性」『縄文土器の儀礼利用と象徴操作』 アム・プロモーション、221-227頁

中村耕作2017「異形注口土器のカテゴリ認識」『理論考古学の実践II実践編』同成社、235-262頁

中村耕作2020「縄文時代後期後半の北日本における堅穴床面出土土器」『縄文時代』第31号、51-78頁

報告書

会田 進ほか1986『梨久保遺跡』郷土の文化財15 岡谷市教育委員会

赤山容造ほか1980『三原田遺跡』1・3

阿部芳郎ほか1997『池之元遺跡発掘調査研究報告書』富士吉田市史資料叢書14

新屋雅明ほか2013『大木戸遺跡II』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第405集

石井 寛1995『川和向原遺跡・原出口遺跡』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告XIX

石井 寛1999『小丸遺跡』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告25

石井 寛2008『華蔵台遺跡』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告41

石坂 茂ほか1985『荒砥二之堰遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第74集

石田 真ほか2009『横壁中村遺跡（9）』群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第466集

石原哲彌ほか1991『垣内遺跡発掘調査報告書』高山市埋蔵文化財調査報告書19

市沢英利ほか1988『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書2 塩尻市内その1』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書2

小倉和重ほか2009「宮内井戸作遺跡（旧石器時代・縄文時代本文編・分析編）（縄文時代遺物図版編）（縄文時代遺構図版編）」印旛郡市文化財センター発掘調査報告書266

忍澤成視1995『市原市能満上小貝塚』市原市文化財センター調査報告第55集

金箱文夫1987～1989『赤山』川口市遺跡調査会報告第10～12集

金子啓彦ほか1997『野津田上の原遺跡』野津田上の原遺跡調査会

木村 收1994『白倉下原・天引向原遺跡II』群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第172集

櫛原功一2008『中久堰遺跡』山梨市文化財調査報告書第11集

櫛原功一ほか1997『社口遺跡第3次調査報告書』社口遺跡発掘調査団
櫛原功一ほか1999『上ノ原遺跡』上ノ原遺跡発掘調査団
櫛原功一1987『姥神遺跡』大泉村埋蔵文化財調査報告第5集
小池岳史・山崎貴弘1993『中ッ原遺跡』茅野市教育委員会
小西直樹2000『原・郷原遺跡』上野原町埋蔵文化財調査報告書第9集
小林清隆・高梨友子2001『君津市寺ノ代遺跡』千葉県文化財センター調査報告第412集
小森明美ほか2014『下北原遺跡III』神奈川県埋蔵文化財調査報告第27集
後藤貴之ほか2010『東京都町田市 東雲寺上遺跡II』町田市教育委員会
齋藤達也ほか2016『横倉遺跡・横倉戸館古墳群』栃木県埋蔵文化財調査報告第383集
佐藤明生ほか1981『深沢遺跡・小野田城跡』八王子市深沢遺跡および小野田城跡調査会
杉山和徳ほか2013『上小笠原遺跡(第1・2・3地点)市内遺跡群発掘調査報告書XX』白岡市埋蔵文化財調査報告書第22集
鈴木佑太郎ほか2021『石川原遺跡(3)』群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第687集
高林重水ほか1996『花上寺遺跡』郷土の文化財19 岡谷市教育委員会
竹林 学ほか1988『松本市林山腰遺跡』松本市文化財調査報告 No. 61
館野 孝ほか1996『多摩ニュータウン遺跡』東京都埋蔵文化財センター調査報告第25集
塚本師也ほか1985『御城田』栃木県埋蔵文化財調査報告第68集
坪田弘子ほか2008『東大竹・下谷戸(八幡台)遺跡発掘調査報告書』玉川文化財研究所
寺田兼方ほか1964『富岡貝塚発掘調査報告』藤沢市文化財調査報告第1集
鶴田典昭1999『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書8—長野市内その6—村東山手遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書44
戸田哲也ほか1999『沼目・坂戸遺跡第II地点発掘調査報告書』沼目・坂戸(II)遺跡発掘調査団
中里吉伸・能登健1988『矢太神沼遺跡』群馬県史1資料編1
長沢宏昌ほか1996『中谷遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第116集
中島広顕ほか1994『西ヶ原貝塚II 東谷戸遺跡』北区埋蔵文化財調査報告第12集
成田勝範ほか1984『なすな原遺跡No.1地区調査』なすな原遺跡調査会
成田勝範ほか1996『なすな原遺跡No.2地区調査』なすな原遺跡調査会
西澤 明・栗城譲一2011『北区西ヶ原貝塚』東京都埋蔵文化財センター調査報告第262集
長谷川福次ほか2010『前中後遺跡I・II・III・IV区』渋川市埋蔵文化財調査報告書第21集
花岡 弘ほか1994『石神』小諸市埋蔵文化財発掘調査報告書第19集
細田 勝ほか1987『神明・矢垂』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第65集
細田 勝ほか1989『中三谷遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第76集
曾根原裕明・富元久美子1989『飯能の遺跡(8)加能里遺跡第8・9次調査 張摩久保遺跡第9・10次調査』飯能市内遺跡群発掘調査報告書6
花輪 宏ほか1983『昭和57年度 市川東部遺跡群発掘調査報告』市川市教育委員会
林 幸彦1979『宮の本』佐久町教育委員会
降矢順子・齋木秀雄2019『称名寺D貝塚第3地点発掘調査報告書』齋藤建設
宮 文子ほか1991『神楽場遺跡・五反目遺跡』佐倉市教育委員会
柳田博之ほか2015『馬場小室山遺跡(第32次)』さいたま市遺跡調査会報告書第163集
山形洋一ほか1995『西大宮バイパスNo.6遺跡』大宮市遺跡調査会報告第48集
山形洋一ほか1989『御藏山中遺跡1』大宮市遺跡調査会報告第26集
山本孝司ほか1998『多摩ニュータウン遺跡』東京都埋蔵文化財センター調査報告第57集
横尾藤雄ほか1991『真光寺・広袴遺跡群V 大久保遺跡・向遺跡』鶴川第二地区遺跡調査会